

福岡市東区

箱崎 11

箱崎遺跡第16次調査報告

福岡市埋蔵文化財調査報告書 第703集

2002

福岡市教育委員会

福岡市東区

箱崎 11

箱崎遺跡第16次調査報告

福岡市埋蔵文化財調査報告書 第703集



遺跡名	箱崎遺跡第16次	調査番号	9835	遺跡略号	HKZ16
調査地	東区箱崎1丁目2725	地図番号	箱崎34	調査原因	共同住宅
調査期間	990118-990129	開発面積	56m ²	調査面積	36m ²

平成14年

福岡市教育委員会



序 文

海に開かれた福岡市は、古くからアジア大陸や半島からの文化や人々を受け入れる門戸として重要な役割を果たしてきました。これら海外からの新しい文物や技術、文化を受容し、どこにもない独自の文化や風土を作り上げる意欲と風土は、現在の福岡市民に引き継がれています。

21世紀を迎え、アジアの拠点都市を目指す福岡市は、道路や商業ビル、マンションなどの近代都市建設が進んでいます。しかし、これらの工事によって地下に眠っている遺跡を破壊することになります。これらの遺跡は、先人たちが私たち現代人に残してくれた貴重な歴史、文化的遺産です。

福岡市教育委員会では、やむをえず遺跡が消滅する場合は、発掘調査を実施し記録保存を行うように努めています。

本書は、東区箱崎遺跡第16次調査の成果をまとめたものです。この調査では、中世から江戸時代に至る造構、遺物が出土し、「筥崎宮」とともに発展してきた箱崎地区の町家やここに暮らす人々の様子を解明する上で貴重な資料を得ることが出来ました。

調査から整理、報告に至るまで、さまざまな面でご協力をいただきました調査委託者の矢野信之様、ならびに東部産業株式会社の方々に、心から感謝申し上げます。また、本書が、埋蔵文化財への理解と認識を深める一助となり、さらに学術研究の資料としても活用いただければ幸いです。

平成14年3月29日

福岡市教育委員会
教育長 生田 征生

例言・凡例

1. 本書は、福岡市東区箱崎1丁目2725の共同住宅ビル建設工事に先だって実施した箱崎遺跡の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は、平成11年1月18日から1月29日まで実施した。箱崎遺跡では、第16次調査に当たる。
3. 本書の編集と撮影は力武があたり、発掘現場での遺構実測、および整理・報告書作成での遺物実測と作図は、羽方誠、坂本幸子、境聰子調査員の4人で分担した。
4. 遺物は遺構ごとに通し番号としている。また、種類が視覚的に区別できるように遺物実測図の断面を次のように表示している。なお、土器、木器類の実測図縮尺は1/3、金属器、銅鏡は1/2に統一している。
5. 地図、遺構図などに用いている方位は磁北で、真北より6°40'西に偏っている。
6. 輸入陶磁器、土師器の分類、編年については、主に次の文献を参考にしている。
横田賛次郎・森田勉「大宰府出土の輸入中国陶磁器について—型式分類と編年を中心にして—」『九州歴史資料館研究論集4』 1978年
太宰府市教育委員会「付編・土器の分類」「大宰府条坊跡」 1983年
山本信夫「統計上の土器—歴史時代土師器の編年研究によせて—」『乙益重隆先生古稀記念九州上代文化論集』 1990年
山本信夫「中世前期の貿易陶磁器」「概説 中世の土器・陶磁器」 貞陽社 1995年
7. 今回の発掘調査によって出土した遺物と実測図、写真などの記録類は、福岡市埋蔵文化財センター(福岡市博多区井相田2-1-9 TEL092-571-2921)に収蔵、保管するので、いつでも検索し見学することができる。多くの方々にご利用いただければ幸いである。

土師器・瓦質土器・瓦器	薄い網点
磁器(白磁・青磁・染付)	白抜き
陶器	濃い網点
瓦類・須恵器	黒ベタ
石製品	斜線
金属器・木器・その他	白抜き



日蓮聖人銅像・東公園

本文・挿図目次

第1章 はじめに	1
1. 調査にいたるまで	1
2. 発掘調査の組織と構成	1
第2章 発掘調査の記録	2
1. 箱崎遺跡の位置と最近の調査	2
Fig. 1 箱崎遺跡の位置と周辺の遺跡分布図 (縮尺1/25,000)	
Fig. 2 箱崎遺跡発掘地点一覧表	
Fig. 3 箱崎遺跡発掘地点位置図 (縮尺1/5,000)	
2. 発掘調査と資料整理	6
Fig. 4 完成したビル	
Fig. 5 第5、16次調査の遺構配置図と主な出土遺物 (縮尺1/100 遺物1/5)	
3. 遺構と遺物	8
1. 土 層	8
Fig. 6 遺構検出状況と南壁土層	
Fig. 7 箱崎遺跡第16次調査遺構平面図と土層図 (縮尺1/50)	
2. 井 戸 (SE)	10
Fig. 8 SE01井戸	
Fig. 9 SE01井戸実測図 (縮尺1/40)	
Fig. 10 SE01井戸出土の遺物実測図 (縮尺1/2 1/3)	
Fig. 11 SE02井戸実測図 (縮尺1/40)	
Fig. 12 SE02井戸出土の遺物実測図 (縮尺1/3)	
Fig. 13 SE03井戸実測図 (縮尺1/40)	
Fig. 14 SE03井戸出土の遺物実測図 (縮尺1/3)	
3. 土 壤 (SK)	16
Fig. 15 SK01~03土壤実測図 (縮尺1/40)	
Fig. 16 SK01土壤出土の遺物実測図 (縮尺1/3)	
Fig. 17 SK01土壤出土の遺物実測図 (縮尺1/2 1/3)	
Fig. 18 SK03土壤出土の遺物実測図 (縮尺1/3)	
4. 攪乱層の遺物	21
Fig. 19 攪乱層出土の遺物実測図 (縮尺1/3)	
Fig. 20 攪乱層出土の遺物実測図 (縮尺1/3)	
4. 小 結	24



第1章 はじめに

1. 調査にいたるまで

矢野信之氏は、福岡市東区箱崎1丁目2725に共同住宅ビルを建設することになり、埋蔵文化財事前審査申請書を平成10年（1998）11月9日付けで福岡市教育委員会埋蔵文化財課に提出された。

事前審査係では、当該地が平成3年7月に第5次調査としてすでに発掘調査を実施しているにもかかわらず再提出されたことや、かつ着工が平成11年（1999）1月末に迫っていることなどから、その経緯や開発内容などを把握し、早急な対応を行うために、設計、施工の東部産業株式会社の担当者と協議を行うことになった。

第5次調査については後述するが、株式会社ダイナより平成3年（1991）6月19日付けで埋蔵文化財の事前審査願いが提出され、同年7月3日に試掘調査を行っている。その結果鎌倉時代から室町時代にかけての遺構、遺物が良好な状態で保存されていることがわかり、株式会社ダイナからの受託調査として平成3年9月9日より埋蔵文化財第1係の田中壽夫が発掘調査を担当した。平成3年10月30日に発掘調査を終え、翌年度に出土遺物や図面、写真などの資料整理を行い、平成4年（1992）3月に調査報告書（福岡市埋蔵文化財調査報告書第273集）を発行している。

その後、着工が行われず駐車場として利用されていたが、事業主が矢野氏になり、設計、開発面積に変更が生じたために事前審査申請書が再提出された。新しい開発内容は、第5次調査部より通称「大学通り」側に7.5m拡張して11階建てビルを建設するというものである。第5次調査の残地56m²を調査対象地とし、矢野信之氏と「埋蔵文化財包蔵地発掘調査委託契約」を締結した。なお矢野氏の個人住宅部が含まれていることから、国庫補助金を一部加えて、下記の組織、体制を整え、平成11年1月11日より2月12日までの予定で発掘調査を行うことになった。

2. 発掘調査の組織と構成

調査委託 矢野信之

調査主体 福岡市教育委員会 教育長 西憲一郎（前任） 生田征生（現任）

調査総括 福岡市教育委員会 埋蔵文化財課

課長 柳田純孝（前任） 山崎純男（現任） 調査第2係長 山口譲治（前任）

事前審査係 田中壽夫 杉山富雄、屋山洋 中村啓太郎 加藤隆也

調査庶務 陶山能成（前任）、市坪敏郎（現任）、河野淳美 谷口真由美 御手洗清

調査担当 力武卓治（調査員）羽方誠（現 沖縄県教育委員会）坂本幸子 境聰子

発掘作業 小路丸嘉人 小路丸良江 永田優子 指原始子 花田則子 池聖子 中村幸子

小池温子 大音輝子 増田ゆかり 田端名穂子 吉川暢子

資料整理 池田由美 宮崎まり子 渡辺敦子 藤元香子 城後渡

また、発掘作業に当たっては、矢野信之氏や東部産業株式会社をはじめ多くの方々よりご理解とご協力をいただきました。ここに記して感謝申し上げます。

第2章 発掘調査の記録

1. 箱崎遺跡の位置と最近の調査

博多湾岸には、かって西の百道浜から東に向かって砂丘が弧状に延び、古くから集落や墓地が営まれてきた。この古砂丘は、東区多々良川でいったん途絶えるが、この北端部に位置する約648,000m²（南北1,400m×東西550m）の遺跡を箱崎遺跡と呼んでいる。

右図は、この地区的古地形を推定し、周辺遺跡の分布と範囲を重ねたものだが、博多湾は多々良川の河口から支流の宇美川側に深く入り込んでおり、ここが「筈崎ノ津」と呼ばれていた入り江であろう。現在の等高線やこれまでの発掘所見からすると、砂丘は、南南西から北北東に砂州状に延びていたと思われ、その尾根線は、現在のJR鹿児島線と箱崎本通り（通称「大学通り」）とのほぼ中間に当たるようである。現在、西の博多湾側は埋め立てられ、倉庫や工場が立ち並ぶ埠頭になり、東側もJR鹿児島線や高層マンションが林立している。とても往時の風景を想像することはできないが、東西を海に挟まれた白砂青松の風景が広がっていたのであろう。西区今津からつながる元寇防壁は、当然この砂丘の博多湾側に築かれていたと推定されている。

箱崎遺跡では、昭和58年（1983）の地下鉄工事に先立つてその路線部を発掘調査して以来、平成13年度末で第27次の発掘調査を積み重ねてきた。現在もJR鹿児島線東西地区の「筈崎地区連続立体交差事業・土地区画整理事業」や箱崎地区を東西に貫く「馬出、東浜線道路新設事業」などの公共事業や民間開発に伴う発掘調査を継続している。これらの調査概要や成果については、各報告書に詳しいのでここでは触れないが、もっとも古い考古遺物は、第6次調査で出土した縄文時代晚期から弥生時代初頭と推定されている磨製石斧がある。次に第18次調査の弥生時代中期の弥生土器であるが、いずれも後世の造構からの出土で、明瞭な生活の痕跡をたどるのは古墳時代からである。第8、20、22次調査では、古墳時代の竪穴住居跡が検出され、定住化が進んだことが分かる。これらの地点は、砂丘の東側斜面にあり、その生業は明らかでないが、博多湾側を避けているのは、入り江側が自然環境が穏やかで生活環境に適していたからであろう。しかし、箱崎遺跡の歴史的発展は、砂丘の中央部に筈崎宮が鎮座するのを待たなければいけない。

博多っ子が「筈崎さん」と親しく呼んでいる筈崎宮は、延喜21年（923）に總波郡大分宮を遷宮し、創建したと伝えられている。「今昔物語」、「宮寺縁事抄」、謡曲「唐船」、「海東諸国記」などの文献資料によると、筈崎宮を中心にして11世紀以降盛んな対外交易が行われ、博多と同じように唐人街もでき、大いに賑わっていたことを知ることができる。

明治以降になると、九州帝国大学や付属病院の設置、そして昭和になって福岡県庁の移設などによって、その都度街の機能も様子も一変し、町名も「箱崎」、「馬出」に統一してきた。しかし「上社家町」や「宮小路町」など旧町名の一歩裏通りに入ると、路地の曲がり具合や家屋の造り、そして玄関に下げられた「お潮井テボ」などに、日々の暮らしが筈崎宮とともにあったことを実感できる。

副都心的な開発が急激に進んでいる箱崎では、さらに発掘調査件数の増加が予想される。筈崎宮創建時の造構を確認し、対外交渉などその後の歴史的変遷を追究することは発掘調査の大変な命題であるが、筈崎宮だけに注目するのではなく、門前町としての形成やここに暮らした町人や職人たちの一日一日の様子を具体的に明らかにしてこそ、初めて箱崎の地域史が語れるものと思われる。

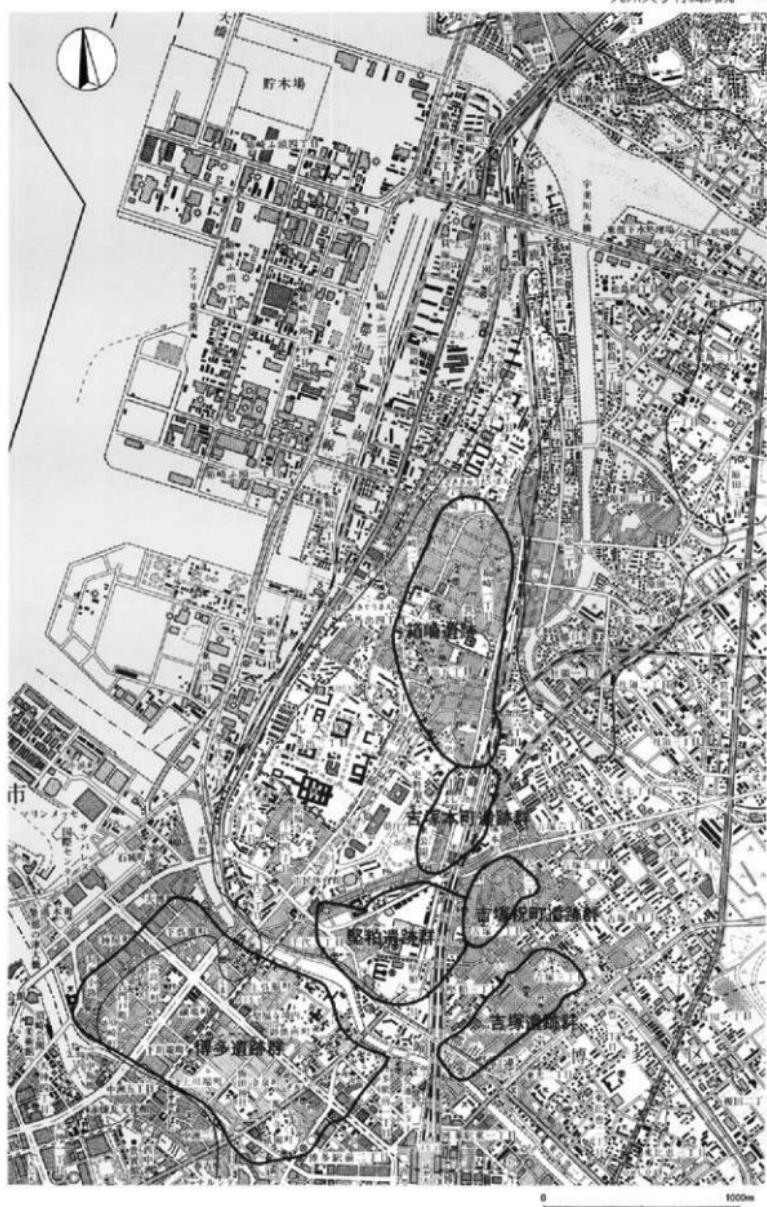


Fig.1 箱崎遺跡の位置と周辺の遺跡分布図（縮尺1/25,000）



発掘一覧 4

笠崎宮南側の発掘

調査 段番号	調査地 調査期間	面積 m ²	調査 原因	相当	佐生 古墳 奈良 平 安 踊 倉 宝 明 戯 国 江戸—													報告書
					佐生	古墳	奈良	平	安	踊	倉	宝	明	戯	国	江戸—		
—3	4—6	7・8	9・10	11	12	13	14	15	16	17—								
1 842	馬出5丁目地内 830704～831218	5,000	地下鉄建設 油崎	—	清、土塼、石塼土壤、井戸、中世墓、近世墓 輸入陶磁器、土師器、瓦、波刀子、鍔堅頭縄車、石錆、土錆													193
2	前崎1丁目18-32 861122～870120	1,500	疗育建設	栗原	—	清、戸、建物地盤、土塼、瓦石 輸入陶磁器、土師器、瓦、瓦片、石錆、土錆												79
3 8967	前崎1丁目2731-1 900109～900221	156	共同 住宅	下村	—	井戸4、土塼32、溝1、ビット67 輸入陶磁器、土師器、土製結構車、石錆、土錆、瓦 瓦環6枚												262
4 8975	前崎1丁目2761 890705	—	施設 建設	京橋 住建	—	土塼 瓦環6枚												市年 4
5 9125	前崎1丁目25・27 910909～911030	210	共同 住宅	田中	—	掘立柱建物1、井戸12、土塼42、櫛河1、窓4 輸入陶磁器、土師器、石錆、瓦、瓦片、石錆											273	
6 9445	前崎3丁目2437-1,4 941029～950131	430	共同 住宅	齊井	—	清、土塼、井戸 輸入陶磁器、土師器、石錆												459
7 9448	前崎1丁目2711号 941115～941227	85	共同 住宅	加藤	—	井戸4、土塼、 輸入陶磁器、土師器、瓦、土錆、耐候、人骨												459
8 9643	前崎1丁目2549 961001～961114	225	共同 居住	田上	古式土塼居2、土塼3 古式土塼器、板状器、陶質土器	—	清、井戸、土塼、 輸入陶磁器、土師器、土錆、瓦、ガラス玉											591
9 9644	前崎1丁目1935-1 961002～961029	191	共同 住宅	本郷 大庭	—	井戸12、土塼、溝1 輸入陶磁器、土師器、瓦器、新銭、瓦、石錆												550
10 9646	前崎3丁目地内 961111～970331	1,620	道路 建設	田上	—	掘立柱建物、井戸4、土塼、溝 古式土塼器、瓦器等		輸入陶磁器、土師器、瓦器、新銭、瓦、石錆										551
11 9715	前崎3丁目2366-1号 970439～970627	385	病院 建設	桙本	—	井戸1、土塼 輸入陶磁器、土師器、瓦器、新銭品												592
12 9735	前崎1丁目2606-1,3 970819～970922	155	個人 住宅	桙本	—	井戸5、土塼1、溝1、土塼 輸入陶磁器、土師器、瓦器、瓦形、滑石緊品												整理中
13 9750	馬出1丁目320-521 971027～971202	297	ビル 建設	佐藤	—	井戸1、土塼2、柱 輸入陶磁器、土師器、瓦器、瓦形、古塵川花瓶、瓦												592
14 9802	前崎1丁目28-15 980402～980523	36	共同 住宅	佐藤	—	土塼10、溝2、小ビット94 輸入陶磁器、土師器、土製筒馬人物像、耐候												625
15 9816	前崎1丁目2615 980525～980605	363	個人 住宅	大庭	—	土塼、ビット、溝 輸入陶磁器、土師器、土錆												整理中
16 9853	前崎1丁目2725 990118～990129	56	共同 居住	力武	—	井戸3、土塼3、小ビット 輸入陶磁器、土師器、石錆、土錆、耐候、木綿											703	
17 9864	前崎1丁目20-19 990308～990331	40	社屋 建設	長東	—	清、土塼、ビット 輸入陶磁器、土師器、瓦												704
18 9921	馬出5丁目470 990614～990928	920	共同 住宅	桙本	—	井戸1、土塼、溝 輸入陶磁器、土師器、耐候、石錆、土錆、青銅鏡、瓦											整理中	
19 9930	前崎1丁目2940-1 990729～990827	160	共同 住宅	長家	—	— 土師器	—	掘立柱建物、井戸8、土塼 輸入陶磁器、土師器、石錆、耐候										整理中
20 9959	前崎1丁目地内 991213～000331	641	区域 整理	桙本	—	壁穴住居3 土師器、輸入陶磁器、土師器、瓦器、石製品		井戸3、土塼1、土塼 土師器、輸入陶磁器、土師器、瓦器、新銭品										整理中
21 9978	前崎1丁目2480 000329～000626	545	共同 住宅	桙本	—	井戸3、土塼1、土塼 土師器、輸入陶磁器、土師器、瓦器、石製品		井戸1、土塼、瓦器、ビット 輸入陶磁器、土師器、耐候、耐候									705	
22 0022	馬出5丁目 000724～010418	2,976	区域 整理	桙本	—	壁穴住居、方形周溝墓 土師器	—	井戸1、土塼、土師器、木箱易、溝 輸入陶磁器、土師器、石製品、和鏡、相模									整理中	
23 0041	前崎3丁目2404 000922～001102	188	共同 居住	長家	—	—	—	井戸1、土塼、ビット 輸入陶磁器、土師器、耐候、耐候、耐候										整理中
24 0047	前崎1丁目2511号 001023～001031	475	共同 住宅	佐藤	—	—	—	土塼、溝、井戸、木棺蓋、 輸入陶磁器、土師器、波刀子										整理中
25 0104	前崎3丁目地内 010416～010426	87	道路 建設	桙本	—	—	—	土塼、ビット 輸入陶磁器、土師器										整理中
26 0108	前崎1丁目1 010505～020329	9,200	区域 整理	佐藤 松浦	—	— 土師器	—	井戸1、土塼、溝、ビット、瓦 輸入陶磁器、土師器、井戸蓋、井戸蓋、瓦、石錆									整理中	
27 0113	馬出5丁目 010607～020210	2,500	道路 建設	中村 上角	—	—	—	井戸1、土塼、溝 輸入陶磁器、土師器									整理中	
28 0118	馬出5丁目248 010702～010712	413	個人 住宅	中村	—	—	—	土塼、ビット 輸入陶磁器、土師器、瓦										整理中

Fig.2 箱崎遺跡発掘地点一覧表

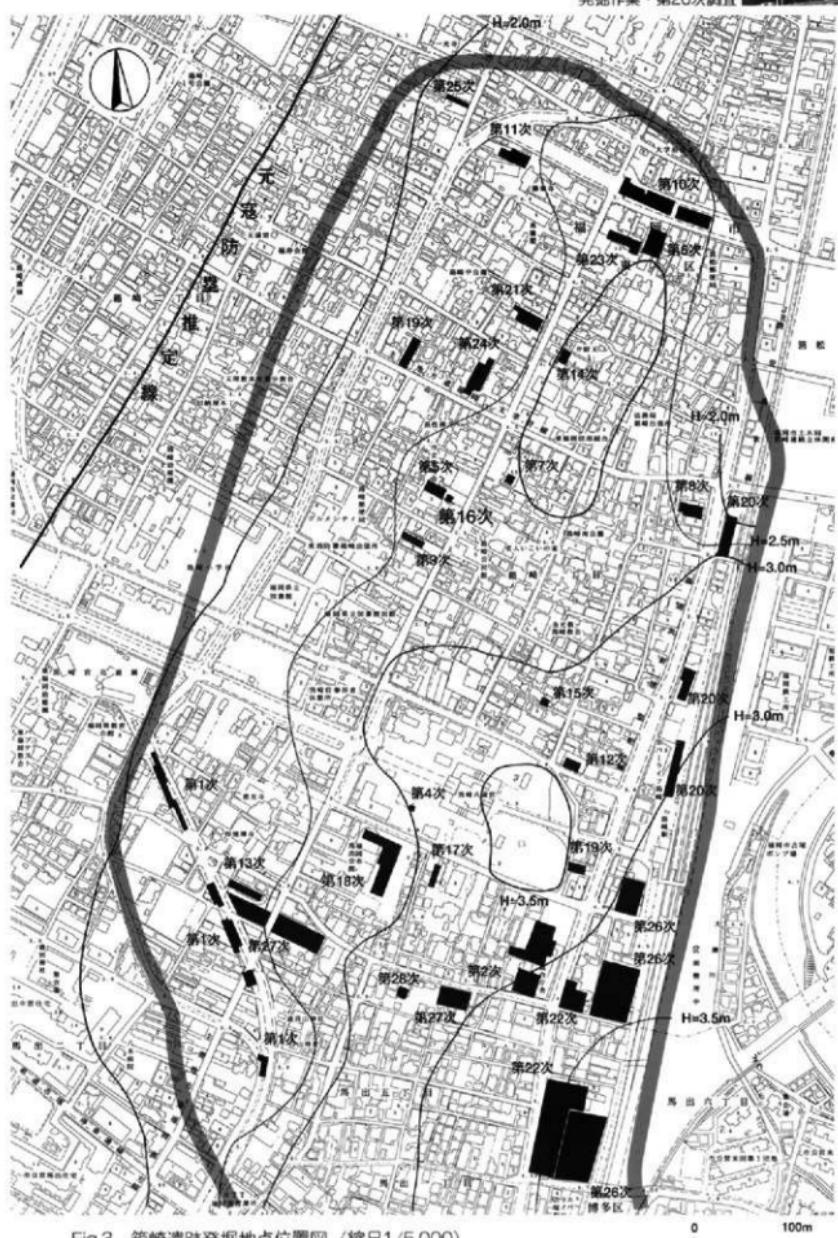


Fig.3 箱崎遺跡発掘地点位置図（縮尺1/5,000）



菅崎宮出土の瓦経

2. 発掘調査と資料整理

第5次調査

調査地は、菅崎宮の北約130mに位置し、箱崎遺跡のほぼ中央部に当たる。申請地は、短辺10.5m、長辺43.5mの長方形で、面積は約457m²、その東短辺側が通称「大学通り」に面している。第5次調査では、当時の建設計画に従って約210m²を発掘している。この結果、柵列1条、掘立柱建物1棟、井戸12基、溝3条、土壙墓（木棺墓か）4基、竪穴遺構42基、小ピット（柱穴か）多数などの遺構を検出し、青磁や白磁などの中国産輸入陶磁器や国産の土師器、瓦質土器、石鍋など多様な遺物が出土した。これらの遺構、遺物から中世前期（鎌倉）、後期、近世後期の三期に大きく分けられている。中でも2間×3間の掘立柱建物跡は、南側に庇が付いており、井戸や柵列など他の遺構との配置関係から、室町時代の屋敷の一部と推定されている。この建物の長軸が、菅崎宮の基軸と方向的に一致し、さらに古砂丘の尾根線に直交している状況から、菅崎宮周辺の屋敷や町筋など門前町復元の上で貴重な成果と意義づけされている。

第16次調査

周辺への周知や挨拶、発掘機材の搬入などの事前準備を終え、平成11年1月18日より発掘調査を開始した。調査対象地は設計拡張に伴う未掘部約56m²である。第5次調査の所見によると、現地表より約180cmの深さで基盤層の明黄褐色砂層に達し、この上面で遺構が確認されていることから、パワーショベルで遺構面までのすき取りを行うことにした。このため重機の回転範囲、廃土置き場、歩行者の安全確保などの対策や制約から、上面で6.5m×5.5m、面積約36m²という発掘区となった。さらに崩落防止のために十分な法面傾斜を取ったために発掘区下面での面積は約21m²に減少した。狭い発掘区ではあるが、第5次調査での成果を補強するだけでなく、新しい発見、特に掘立柱建物の検出、さらに土層の観察や近世以降の遺物にも注目して発掘作業を進めることにした。

発掘の結果、井戸3基、土壙3基、小ピットを検出し、実測、撮影などを済ませ、1月29日に発掘作業を完了した。遺物はパンコンテナ20箱分の中国産青磁、白磁、銅錢。国産の土師器、瓦質土器、陶磁器、石鍋、土鍤などが出土した。

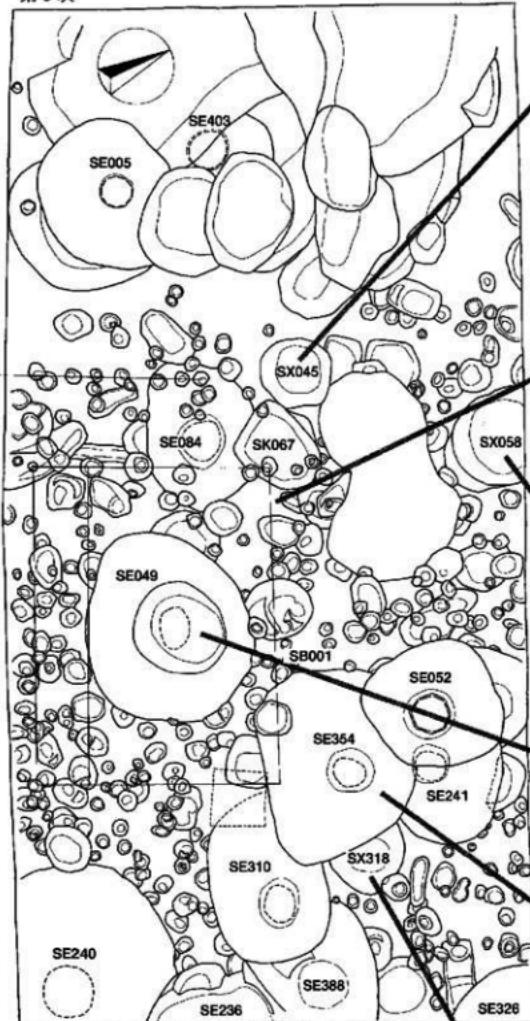
資料整理

調査終了後、出土遺物や図面、写真類などの資料整理を行い、調査結果を速やかに公開するのが、発掘担当者の責務であるが、引き続いて博多遺跡第113次調査を担当し、さらに異動も重なり報告発行が平成13年度に遅れた。その理由の如何にかかわらず責務が果たせなかつたのは、私の怠慢であつて、大いに反省している。発掘区の狭さから当初の目的が十分果たせなかつたこともあって、資料整理では、遺物の検討や実測に十分な時間をかけ、搅乱層の近世遺物についても、どんな小片も見逃さないで実測、図示するように心掛けた。なお発掘区の長軸は、磁北より西に62°振れているが、ここでは長軸を東西方向とし、長辺側を北壁、南壁、短辺側を東、西壁として記述する。

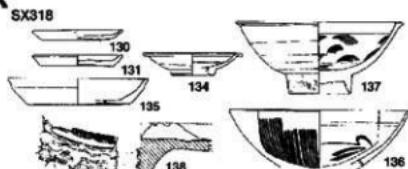
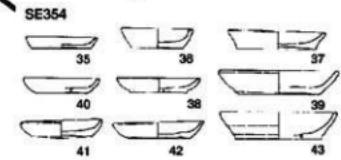
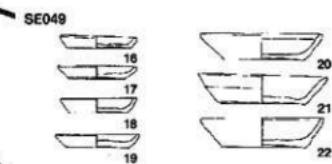
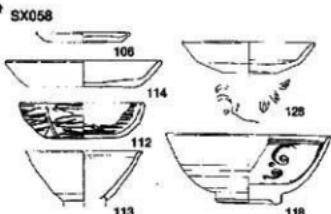
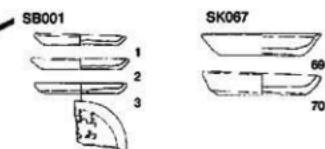
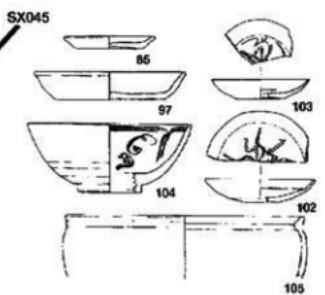
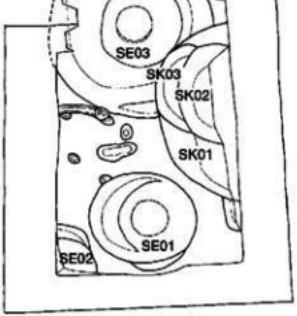


Fig.4 完成したビル

第5次



第16次



0 10cm

Fig.5 第5、16次調査の遺構配置図と
主な出土遺物（縮尺1/100 遺物1/5）



土層 8

発掘作業・第16次調査

3. 遺構と遺物

地山の明黄褐色砂面で検出した井戸 (SE)、土壤 (SK)、小ピット (SP) の遺構には、その種類ごとに通し番号を付した。ここでは土層の観察結果を先に記し、井戸、土壤とその遺物の順に取り上げ、最後に搅乱層の遺物について報告する。なお小ピットからは、回転糸切り底の土師器、中国産白磁、青磁などの遺物が総数80点出土したが、実測できない程の小片であった。

1. 土層

第5次調査では、周囲に矢板工事のために土層の観察は、発掘区中央部で行われている。今回は、南北2壁を清掃し、第5次調査との対比、検討を加えながら実測をした。

南、北壁の土層堆積は、第5次調査の観察結果と基本的には共通している。アスファルトの現地表下-70cm前後までは現代の整地層で、特に西寄りは第5次調査時のすき取りと埋め土による搅乱を示している。この下部には50~70cmの厚さの暗褐色、黒褐色土の砂質土層があり、土色や土質、内容物など視覚的な違いから数層に分けることができる。上部からは主に近世の遺物が出土し、下部は中世の遺物を含んでいる。北壁の中央には、SK01~03土壤、南壁にはSE02井戸の掘り込みが認められる。地山である明黄褐色砂は、現地表から-170cm前後の深さで現れる。従って地山は第5次調査区側より高く、箱崎遺跡の古砂丘が博多湾側に傾斜しているという推測をあらためて裏付けた。

遺構の検出は、写真のように容易に識別出来るが、井戸や土壤など本来深い遺構は、南北壁に見られるように、上層から掘り込まれた可能性が強い。また第5次調査では、中央部から南東部にかけて暗褐色砂層上に固く縮まった焼土層が認められており、出土遺物から中世後期の形成と推測されている。今回も南壁に同じ焼土層が見られ、元寇による焼失に関するものか今後の課題である。



Fig.6 遺構検出状況と南壁土層

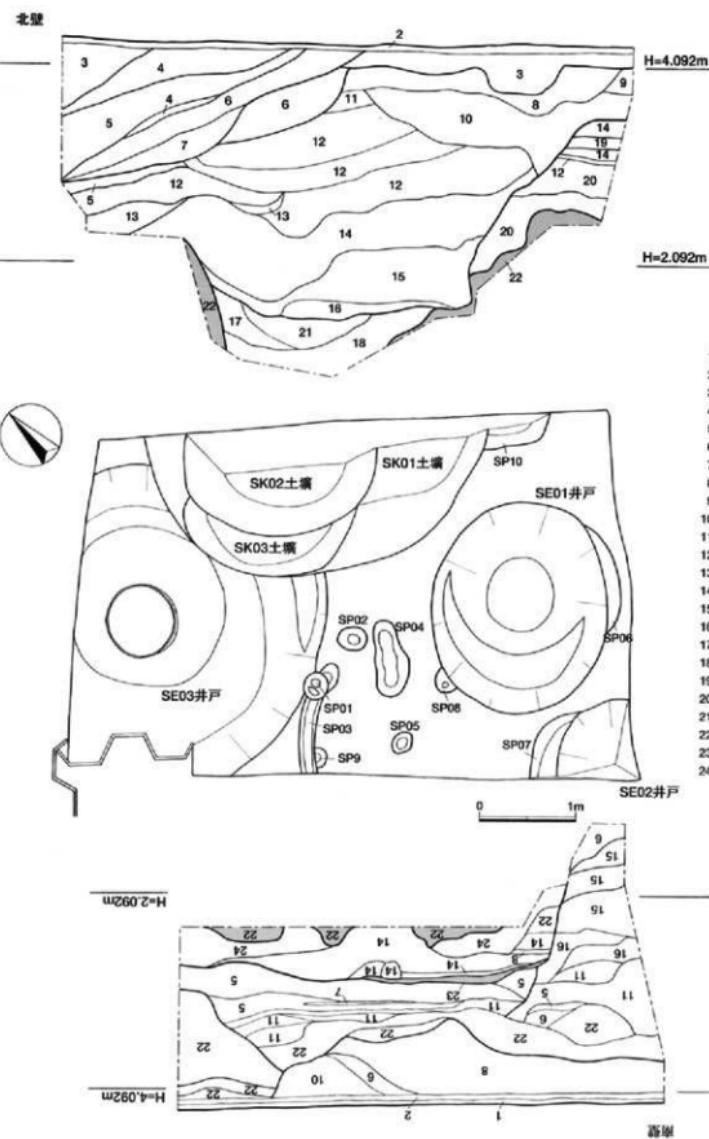


Fig.7 箱崎遺跡第16次調査遺構平面図と土層図（縮尺1/50）



SE01井戸 10

測量作業・第16次調査

2. 井戸 (SE)

第5次調査で、発掘区中央から東側にかけて12基の井戸が集中して検出された。井筒の作りに違いがあり、曲げ物1基、木桶9基、板組1基、石組1基、瓦組1基である。これらは同時期に使用されていたわけではなく、出土遺物から、中世前期2基、中世後期8基、近世2基の時期が推定されている。砂地であることから崩落しやすく度重なる掘り直しを考慮しても、その密集度は異様である。おそらくこの場所に枯渇しなかった豊富な水脈の存在があったこと、そして町筋や町家の配置などの土地利用に強く規制された結果であろう。今回は3基の井戸を検出した。このうち西側のSE03井戸は、第5次調査で未掘であったSE236の中心部に当たる。SE02井戸は、底面まで確認していないが、その掘り込みの形状から井戸と判断した。従って2基の井戸を新たに加えたことになり、井戸用地は、さらに発掘区の東側に広がっていたと予想された。

SE01井戸

発掘区東寄りにあり、検出面での平面形は長軸216cm、短軸180cmの楕円形である、南西側に鈍い段を設けるが、壁は円筒状にほぼ垂直に掘り込まれている。検出面から-130cm前後ですばり、木桶を置いている。この木桶底面までの深さは-190cmを測る。木桶部分周囲の砂層は粒子が粗く、今でも水分を多く含み、しばらくすると水が湧き出していく。この水分に守られて木桶の痕跡が辛うじて残っていたが、取り上げることは出来なかった。現地の計測では、幅8cm、高さ40cm前後の板材を直径74cmに組んでいたが、板材の枚数、たがの存在は確認出来なかった。遺物は井筒と掘り方から出土したが、いずれも破片で完形品はない。また廃棄時に井戸封じなどの祭祀が行われた形跡も認められなかった。

遺物

土師器170点、瓦器・瓦質土器32点、白磁17点、青磁13点、陶器15点、銅錢1点、鐵製品12点、木製品1点、滑石片2点が出土し、このうち計14点を図示した。

土師器（1～2） 2点とも回転糸切り底の土師器皿である。1は、口径8.1cm、器高1.1cm、底径6.9cm。井筒の中程で出土した。精良土が用いられ、濃茶色を呈している。2は、口径13.6cm、器高2.5cm、底径8.4cm、井筒の下層出土。

白磁（3） 3は、井筒下層から出土した白磁碗の口辺部の小片、口径16.6cm。体部外面は、口辺部近くまでヘラ削りで端部は丸細くおさめ、内面下1.7cmに浅い沈線1条を巡らせている。釉はわずかに緑がかった灰色で、体部外面下半は露



Fig.8 SE01井戸

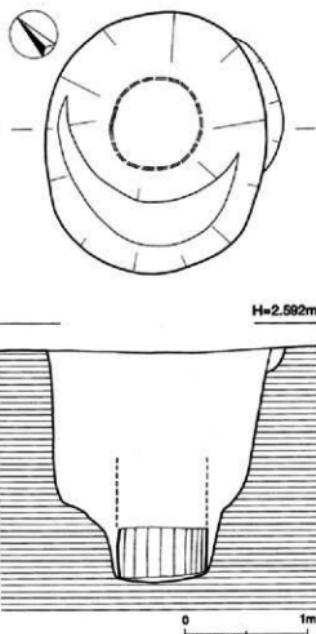


Fig.9 SE01井戸実測図（縮尺1/40）

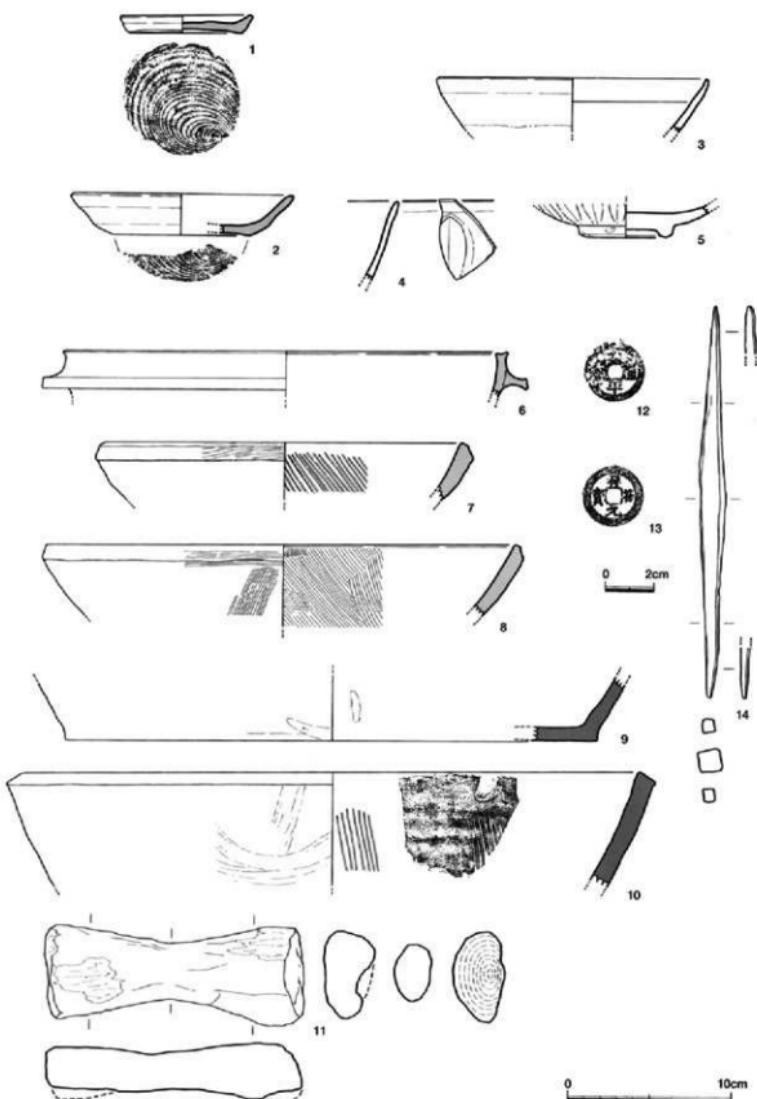


Fig.10 SE01井戸出土の遺物実測図（縮尺1/2 1/3）



遺物整理・箱崎遺跡調査事務所

胎となる。口辺端部と体部釉端は、かすかに茶色となる。内外面とも貫入はない。底部を欠くが白磁碗V-1類とした。

青磁(4、5) 2点とも体部外面に鎌蓮弁の紋様をもつ中国龍泉窯系の青磁碗I-5類。4の蓮弁は、明瞭な輪郭に彫り込まれているが鋸は鈍い。灰色がかった薄い青色釉が均一にかかり、内外面とも大きな貫入が見られる。5は、鎌蓮弁碗の底部。底径5.4cmで、濃灰青色の釉は高台付まで達している。胎土はきめ細かく濃灰色。高台の削り出しが浅く、見込みは分厚い作りとなっている。

瓦質土器(6~8) 6は、井筒中層出土。口径27.2cmで、口辺部下に鋸を貼り付けた鍋。外面は灰黒色、内面は灰色を呈し、堅緻な焼成である。7、8は掘り鉢。7は井筒下層出土、口径23.0cm。8は掘り方中層から出土、口径29.4cm。器形、器面調整、胎土など同一個体のようによく類似しているが、7が小さく、内面も灰白色ではなく黒みを帯びている。

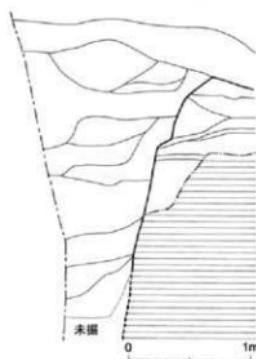
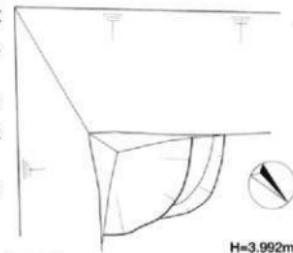
陶器(9、10) 9は、掘り方下層から出土した盤の底部破片。外面は露胎で、胎土と同じ褐色を呈する。内面には灰釉が均一にかかり、一部に褐色釉の滴が落ちている。径32.6cmの底部は、ほぼ平坦となっている。10は、井筒下層から出土した掘り鉢、口径39.6cm。直線的に開き、そのまま外傾して口辺部となる。外面には透明釉を薄くかけている。内面の櫛目は7本で鋸い。

木製品(11) 木桶内から出土。広葉樹の芯持ち材を加工している。腐食のため脆弱となり、やや変形している。長さ15.9cm、中央部は24mm×35mm、右端は33mm×55mmの断面楕円形。形状から木錘と考えた。

銅銭(12、13) 12は、中国北宋太平興國元年(976)初鑄の「太平通寶」。13は、中国北宋大中祥符元年(1008)初鑄の「祥符元寶」、いずれも水分の多い井筒下層から出土したが、保存状態はよい。

鉄製品(14) 出土時には漁具と考えたが、鋸を落とすと図のように中央部断面が9mmの方形で、全長は16.1cmとなった。両端が同じように尖っており、建築用か。

井筒と掘り方出土の遺物に大きな時代差ではなく、13世紀代に掘削され、短期間のうちに破棄、埋没したと推定した。



SE02井戸

前記したように発掘区南東隅で検出したもので、全体の1/4にすぎず、また井筒も確認していないが、南壁に見られる掘り込みが直線的であり、その埋め土も上下に大きな違いがないことから、井戸と判断した。他2基の井戸と同じような時期の遺物が出土し、特に新しい時期の遺物が含まれているわけではないが、近、現代の土層下より掘り込まれており、長期に渡って使用された可能性がある。第5次調査のSE005は、近代まで使用され昭和初期に埋め戻されたと報告されている。同じような例は、博多でも知られており町家の安定した存続期間を物語るものであろう。また他2基の井戸は、地山黄褐色砂層面で検出したが、その掘り込み面を検討する上でも重要である。次に記す遺物から14世紀前後と推測した。

Fig.11 SE02井戸実測図(縮尺1/40)

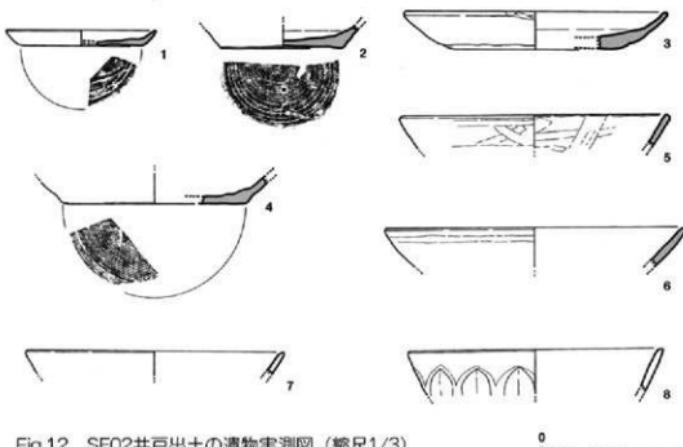


Fig.12 SE02井戸出土の遺物実測図（縮尺1/3）

0 10cm

遺 物

全体を完掘していないので出土遺物は少なく、その破片数は、土師器22点、瓦質土器5点、白磁1点、青磁2点、滑石片1点に過ぎない。このうち8点を図示した。

土師器（1～6） 1は、回転糸切り底の小皿。口径9.1cm、底径7.4cm、高さ1.0cm。2も同じように底部は回転糸切り、底径7.2cm。3は、回転糸切りの底部から丸みを持って体部へ移行している。口径16.2cm、高さ2.3cm。4は、黄白色の胎土を用いた底径11.0cmの皿。丁寧な調整を施している。5は、口径16.6cmの杯。内面は丁寧なナデで、ミガキの効果が出ている。6は、口径18.4cm、小片のために傾きは不正確。5に比べ口辺端部は丸みがある。

青 磁（7、8） 7は、口辺部の小片。口径15.8cmに復元した。灰緑色釉を薄くかけている。貫入はない。8は、鎌蓮弁文の椀、口径15.6cm。わずかに青みを帯びた灰緑色釉。蓮弁の鎌は不明瞭。

時代を決める程の遺物点数ではないが、ここでは13～14世紀と幅をもたせておく。

SE03井戸

発掘区西側寄りで検出した。その東端がSK01土壤に切られ、SK03土壤を切っている。さらに西端は発掘区外に出ているので、全形は不明。しかし西側部分は、第5次調査との合成図で見るとSE236の遺構番号が付せられた井戸とつながり、同一であることが分かる。明黄褐色砂検出面での平面プランは、東西方向に長く、卵のように西側が尖った楕円形で、長軸380cm、短軸320cm前後の大きさに復元できる。掘り方は東側に段があり、土壤など時期の違う遺構を切っている可能性があるが、平面プランの大きさからするとSE02井戸のように直線的ではなく、緩い傾斜の掘り方であったのだろう。検出面から深さ約180cmで底面となり、わずかに浮いて木桶が残っていた。残存状態はSE01井戸よりも良好であるが、やや変形しており、最大径は75cmを測る。厚さ1cm前後、幅10cm、高さ42cmの板材を使っている。第5次調査区では、中世後期のSE240、310、388の各井戸を切っている。



SE03井戸 14

從是東表穂屋御牌・旧宮前町

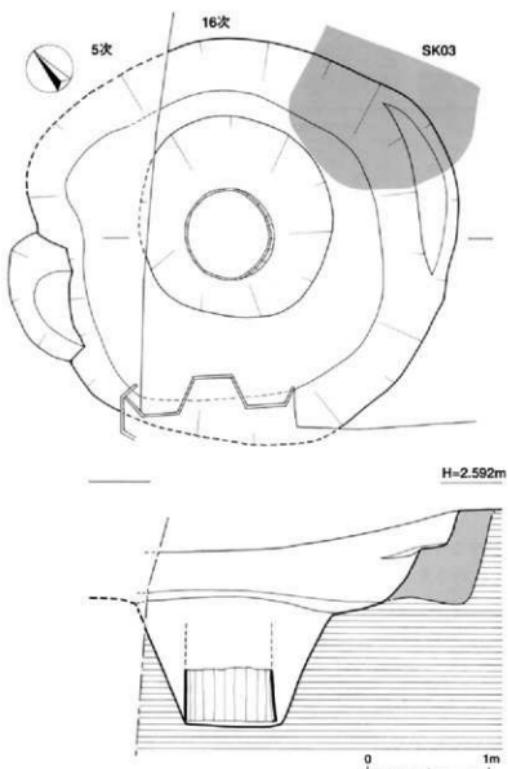


Fig.13 SE03井戸実測図（縮尺1/40）

ている。5、6は、井筒中層から出土した玉縁口辺部を持つ白磁碗Ⅳ－1類。5は口径17.8cm、玉縁の口辺部は、下方に垂れ気味。6は、口径19.0cm、体部は大きく開き、灰白色釉は外面下半には施釉されていない。7は、井筒中層の出土。白磁碗の底部。高台径3.9cm、高台、体部とも削りは粗雑。釉色は灰白色で、見込み内底は蛇の目状に搔き取る。

青 磁 (8~10) 8は、口径8.8cmの青磁小碗。井筒中層出土。丸みのある体部は、口辺部でわずかに内湾気味に先細くおさめている。灰青色釉を厚めにかけており、口辺端部は露胎、その釉端は赤茶色となっている。外面だけに大きめの貫入がある。9は、掘り方上層出土した鎬蓮弁文碗。口径14.6cm、蓮弁文は立体的に鎬も明瞭に彫り出している。青みを帯びた灰色釉、貫入はない。10は、龍泉窯系青磁碗の底部、高台径は6.2cm。くすんだ灰緑色釉、内底に目跡がある。高台の削り、施釉とも粗雑。

陶 器 (11~14) 11は、井筒中層出土の擂り鉢で口径28.4cm。内外面とも濃褐色で、口辺部を肥厚させ、内外面に透明釉を雜に流す。内面に放射状に刻んだ櫛目はきわめて鋭い。12は、掘り方上層か

遺 物

井筒、掘り方から出土した遺物は、土師器217点、瓦器・瓦質土器20点、須恵器・須恵質土器1点、白磁14点、青磁27点、陶器39点、染付1点、石鍋1点、金属器1点、自然石6点で、このうち14点を図示した

瓦質土器 (1) 1は、口径18.0cmの椀。井筒中層出土。内外面とも濃灰色でヘラミガキを加えている。内面は幅広く、外面は細かい。精良土を用い、堅緻な焼成。

白 磁 (2~7) 2は、白磁碗の口辺部小片。口辺端部を水平に小さく引き出している。口辺内面に純い沈線を加えている。外面に小孔（ピンホール）が見られる。3は、井筒中層出土の白磁皿。口径11.6cm、口辺端部を施釉しない、いわゆる口禿になっている。その釉端は赤茶色。体部は直線ではなくわずかに内湾している。4は、井筒中層出土の白磁碗V類。口径15.4cm、丸みを持って外に開く体部は、さらに鈍い段をつけて小さく開いた口辺部を作る。屈曲部の内面には浅く細い沈線が1条巡らせ

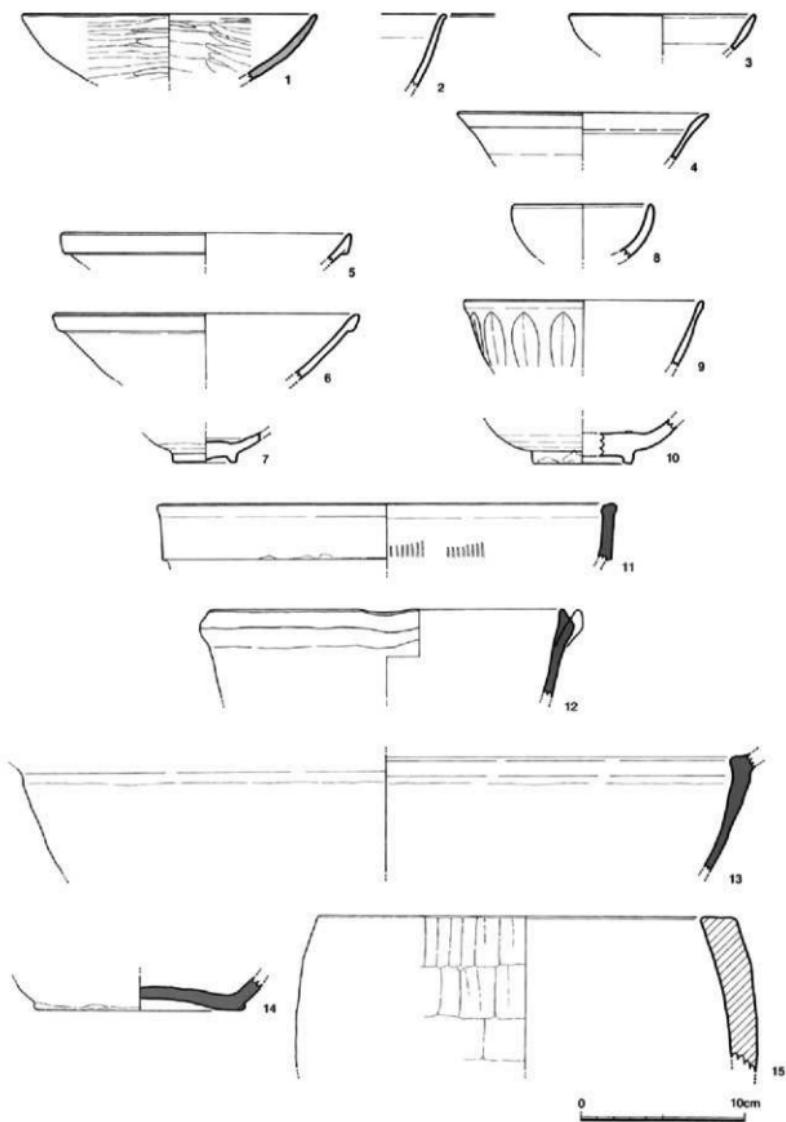


Fig.14 SE03井戸出土の遺物実測図 (縮尺1/3)



SK01土壌 16

大楠・菖崎宮

ら出土した挿り鉢、口径21.4cm。きめの粗い胎土で内外面濃灰色となる。断面蒲鉾形の口辺部外面には、自然釉がかかり黒変している。残存部には櫛目はない。小片のため傾き不正確。本来はさらに開くのであろう。13、14は、盤の体部と底部であるが、大小の器形となり同一個体ではない。13は、口辺端部を欠くが、上方に小さく開き、内面が窪む断面となるのであろう。内端径は42.0cm、内面に灰緑色釉、外面に透明釉をかけている。灰色の胎土はきめが粗い。掘り方上層出土。14の底径は、13.0cm。外面は、露胎で灰茶色。内面の灰褐色釉は、発色が悪い。井筒中層からの出土。

石製品(15) 15は、井筒中層から出土した口径25.6cmの石鍋。外面にはノミの加工痕がよく残り、煤で黒色となっている。削れた後、再加工した形跡はない。

これらの遺物や他遺構との切り合いから、14世紀前後の時期を推測した。

3. 土 壤 (SK)

発掘区北壁寄りに土壌が重なっている。これらの前後関係を北壁の土層で観察すると少なくとも3基あったことが確認でき、SK01から03の遺構番号を付した。その順はSK03からSK02、SK01と新しくなることが分かるが、平面的な発掘では、埋め土の砂にはほとんど変化がなく、SK01土壌の底面を掘りすぎ、下部のSK02土壌の遺物を混入させる結果となった。

東側に接するSE03井戸は、SK03土壌を切り、最も新しいSK01土壌が逆に切っている。

SK01土壌

3基のうち最も後出の土壌である。北壁で見るとその東掘り方ラインは、土層20、22あたりから認められる。西側のラインが発掘区外に出て、全形が分からぬが、幅3m以上の大きな落ち込みだったのだろう。残った西壁の掘り込みラインから推測すると、現地表下-140cm前後から斜めに掘り込まれ、-210cmから垂直な壁となり平坦な底面を作っている。土層16が底面直上の土層であるが、特別に固くなるなどの下部のSK02土壌との違いは認められない。

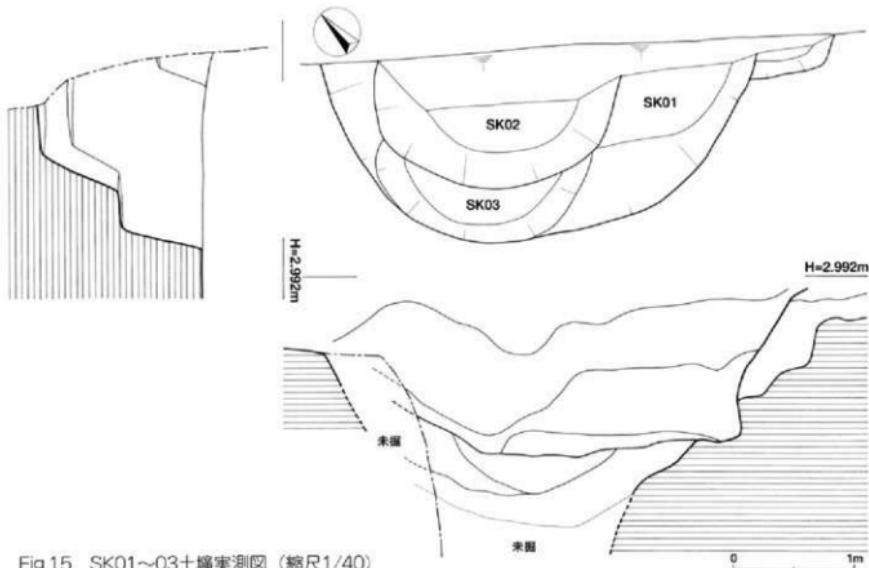


Fig.15 SK01~03土壤実測図 (縮尺1/40)



遺 物

土師器311点、瓦器・瓦質土器29点、須恵器・須恵質土器6点、白磁17点、青磁41点、陶器56点、石鍋片3点、銅錢1点、自然石28点が出土した。点数は破片数であって個体数ではない。

須恵器（1、2） 1は口径14.0cmの蓋。天井部のヘラ削りは1/2に当たる。口辺部のみ灰を被る。

2は口径18.6cm、底径15.0cm、器高2.0cmの皿。内外面とも薄い灰色。

土師器（3～7） 3～6は小皿。3の口径は8.9cm、4の口径は9.2cm、器高は低く、わずか0.8cmしかない。5の口径は9.0cm、内底はナデ調整。いずれも回転糸切り底で、精良土を用いて焼成もよい。6は器高3.2cmと深みのある器形で、口径は12.0cm。底部は回転糸切り。焼成、胎土とも良い。7は丸みのある底部で口径16.6cm。内面は幅広のナデ調整。ミガキの効果はない。

瓦 器（8、9） 瓦器の椀で、8は口径15.0cm、9は口径16.0cm。ミガキは8が内面に、9は内面に加えている。いずれも胎土は、きめ細かな精良土が用いられている。

瓦質土器（10） 10は東播系の鉢。内外面とも灰色であるが、玉縁状の口辺部だけが黒色となっている。胎土はわずかに砂粒を含んでおり、きめはやや粗い。口径28.0cm。

白 磁（11～20） 6点の白磁は、皿と鉢の口辺部。11～13は、いわゆる口禿。いずれも小破片のために、口径、傾きなどやや正確さを欠いている。11は、口径10.0cmの口禿の皿。灰白色の粗い胎土にはほぼ同色の釉がうすくかかり、露胎となった口辺部は、茶色に変化している。12の体部は、朝顔状に大きく開く。口径14.4cm、釉色は白色に近く、胎土もきめ細かい。口辺部上、内面が無釉。13の体部は、内湾気味にのび、小さく外反する口辺部となる。灰色釉は、口辺部と底部にはかけられていない。この露胎部は、赤みを帯びた茶色である。口径12.8cm、底径6.4cm、器高2.8cm。14の口辺部は、わずかに内湾気味で端部を細くおさめ、内面下にかすかな沈線が巡る。口径13.4cm。15の口辺部は、水平に引き出しており、外面の屈曲部は浅い沈線状になっている。釉色はわずかに緑色がかった灰色で、外面には小孔が目立つ。口径14.8cm。16は、口径16.6cmの薄手作りの椀。口辺部外面は強く横ナデして鈍い段がつき、内面にも浅い沈線が巡る。灰白色の釉は、均一にかかり、貫入、ピンホールとともにない。17、18は、白磁椀IV玉縁口辺。17の玉縁断面は丸みがあり、内外面ともに細かな貫入がある。18は、口径17.5cm、釉が厚くかかった玉縁には、無数のピンホールがあばた状に見られる。19、20は、玉縁口辺椀の底部で外面は露胎。19は高台径7.2cmで灰色釉、20は高台径7.0cmで黄白色釉、いずれも外面は露胎。

青 磁（21～27） 21、22は、龍泉窯系青磁椀I～5類。21の口径は15.0cm。青灰色釉が均一にかかり、外面に大きな貫入がある。蓮弁文はやや細身で、やや傾いている。22の口径は16.0cm、外面の鎌蓮弁文は大きいが、彫りが浅く、鎌も明瞭でない。胎土は灰色できめ細かく、灰緑色の釉が均一にかかりっている。貫入はない。23は、蓮弁文椀の底部で、高台径5.7cm。焼成が悪いせいか釉の発色が悪く、灰色の強いオリーブ色を呈する。胎土もうすい赤茶色となっている。24は、同安窯系青磁椀で口径13.8cm。わずかに緑色を帯びた灰色釉。体部外面は櫛目を斜めに加えており、見込みにも片彫り文様の一部が見られる。25は、青磁小椀の底部。径3.6cmの高台は、削り出しが浅く、厚みの底部となっている。灰緑色の釉は高台内まで施釉されている。高台内には、砂が付着している。26は、型押し花文の小椀、口径10.4cm。濃いオリーブ色の釉が厚くかかり、両面ともに細かな貫入が見られる。27は、壺口辺部。灰緑色の釉は内面もかかり、外面には褐色釉を流している。口径9.2cm。

陶 器（28～31） 28、29は、口辺部内面に1条の凸帯を巡らせた鉢の口辺部。小破片のために、口径不明。28の口辺部は厚みのある作りで、1mm大の白色砂粒を含む胎土は、小豆色をしている。29の



SK01土壙の遺物 18

庚申塔・旧上小寺町

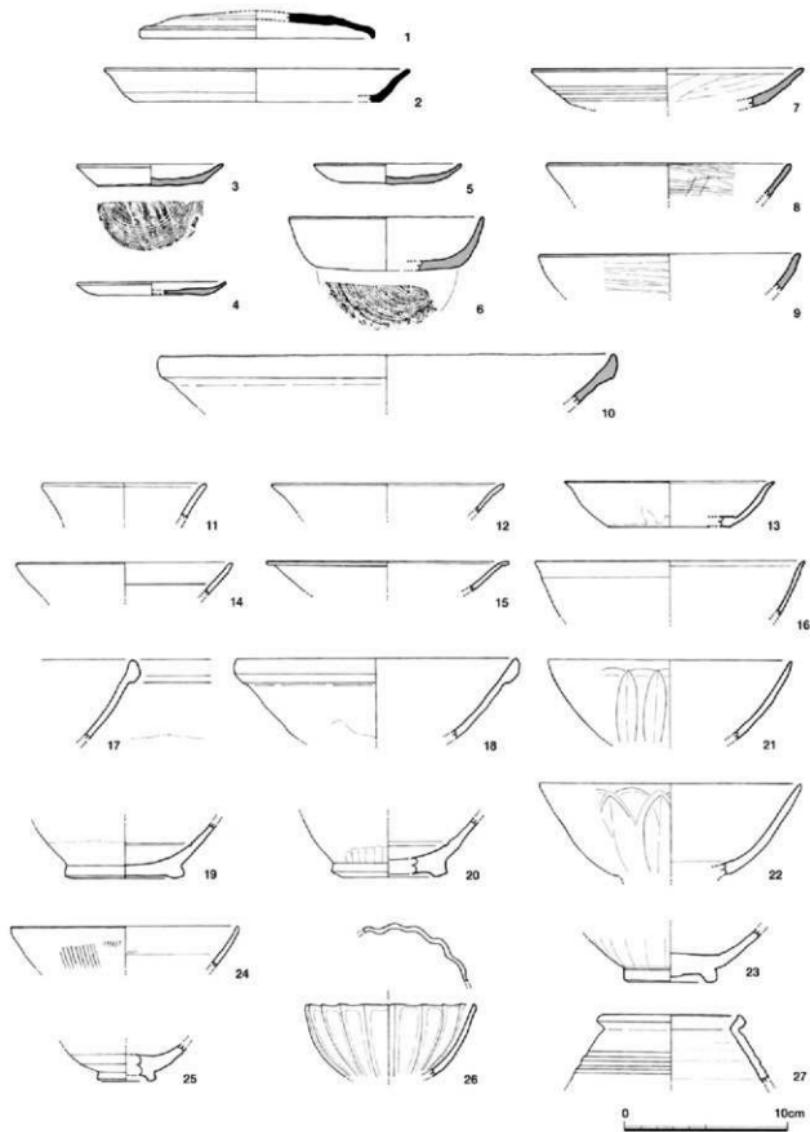


Fig.16 SK01土壙出土の遺物実測図 (縮尺1/3)

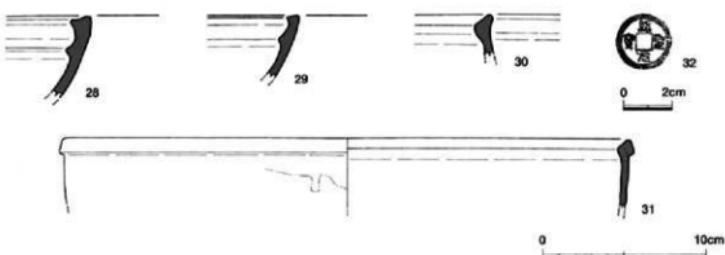


Fig.17 SK01土壤出土の遺物実測図（縮尺1/2 1/3）

胎土は、さらに多くの白色砂粒を含み、黒褐色をしている。30も内面に肥厚し、上面が内傾した口辺部であるが、凸縁が巡るかは不明。胎土は灰赤色で、砂粒の含有は少なくきめ細かい。灰緑色の釉がうすくかかっている。31は、口径35.2cmの盤。口辺部は、外面に折り返し内面から外面口辺部下まで灰黄色釉がかかる。釉端は、うすい茶色。胎土は黄白色で、露胎部は砂粒が浮き出している。

銅 錢 (32) 32は、中国北宋紹聖元年(1094)初鑄の「紹聖元寶」、直徑2.38cm、わずかに緑青が付くが保存状態はよい。

これら出土遺物には時期差があるが、SK01の埋没時期は14世紀前半と推測される。

SK02土壤

SK02土壤の下部土壤。大部分が北壁側にあり崩落の危険性があったことから安全優先で完掘を避けた。残りの形状からすると、直徑2m以上の円形だったと推測出来る。埋め土は、黄褐色砂がレンズ状に堆積しており、地山とほとんど区別できない。遺物は先に記したようにSK01土壤として取り上げている。

SK03土壤

SK02土壤よりわずかに南側にずれ、しかもSK02土壤に切られていることから、北壁では埋め土の堆積状況を見ることは出来ない。SK02土壤と同じような円形プランで、その直径は180cm前後か。地山検出面からの深さは、90cm前後である。壁、底面とも直線的ではなく丸みがある。

遺 物

出土遺物の破片数は、土師器170点、瓦器・瓦質土器18点、須恵器上器・須恵器6点、白磁8点、青磁14点、陶器12点、石鍋4点、瓦1点、土鍾1点、自然石21点を数える。

土師器 (1~8) 1~4は小皿。口径はそれぞれ1が8.8cm、2が10.4cm、3が9.6cm、4が9.2cm、いずれも回転糸切り底である。5~8は、やや大きめの皿。5の口径は14.6cm、6の口径は16.2cm、7の口径は17.6cm、8の口径は16.0cm、同じように回転糸切り底。8の届曲部は丸みがある。

瓦 器 (9) 9の椀は、口径15.1cm、器高4.5cm、高台径5.6cm。きめ細かな胎土で、内外面に不規則な細いミガキを加えている。

瓦質土器 (10) 10の椀は、口径13.4cm、器高5.5cm、高台径5.6cm、内外面ともに灰色。



芭崎宮の放生会

SK03土壌の遺物 20

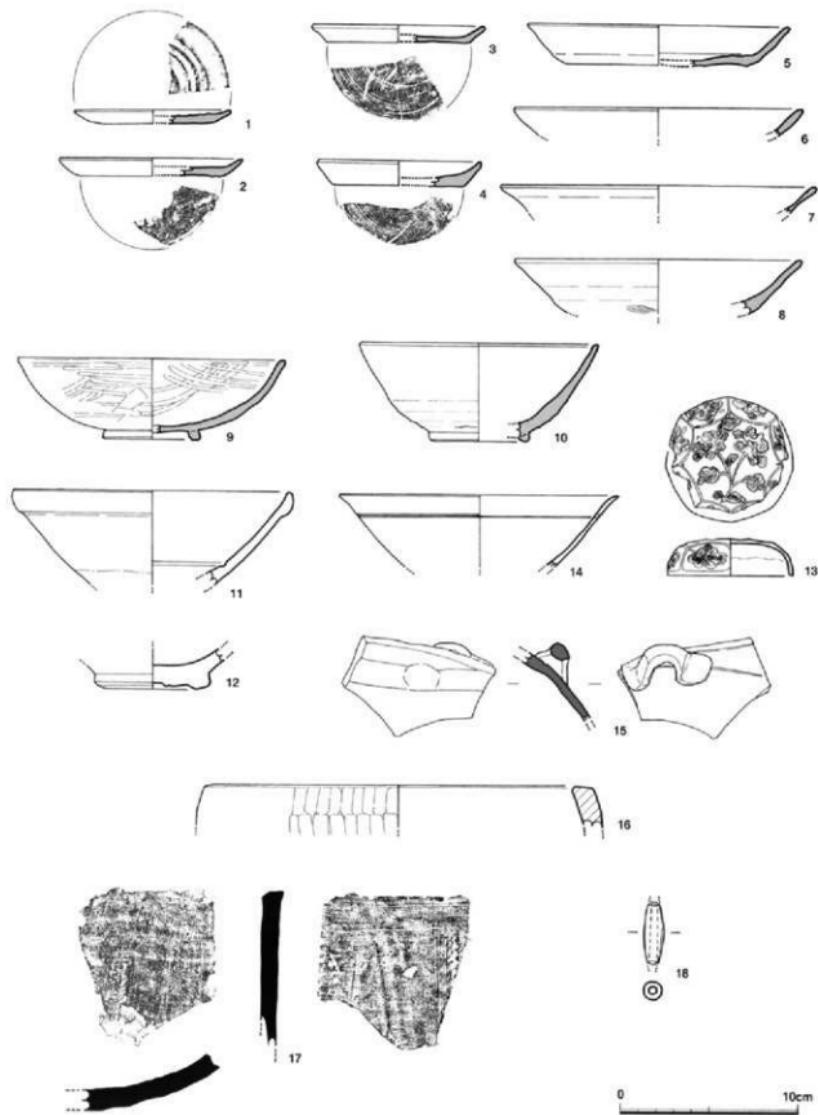


Fig.18 SK03土壌出土の遺物実測図（縮尺1/3）



白 磁 (11~13) 11は、玉縁口辺をもつ白磁碗で、口径15.9cm。見込みの体部と内底との境には沈線状の段を設け、体部は内湾気味に大きく外に開いている。くすんだ灰白色釉には、細かな貫入がある。12は、白磁碗IV-1類の底部。高台の削り出しは粗雑で浅く、高台径6.5cm。見込みの釉は、わずかに灰色を帯びた白色、外面は露胎。13は、白磁合子の蓋。口径5.0cm、器高2.1cm。天井部とアーチ状に8区画した側面にも同じモチーフの草花文を配置している。型押しで口辺部外形は8角形だが、内面は正円となっており、よく整った美しい意匠である。かすかに青みを帯びた白色釉は、内側の側面にはかけられていない。

青 磁 (14) 14は、口径15.6cm、櫛やヘラによる紋様はない。器壁は薄く、口辺部は小さく外に反る。灰色を帯びたオーリーブ色の釉は、外面に垂れ、口辺部下方の外面に沈線1条を巡らせている。

陶 器 (15) 15は、耳部の破片。その数を確かめようがないが双耳壺、あるいは四耳壺の肩部に当たる。灰色の胎土は割りと細かく、焼き縮まっている。内外面に灰色を帯びた茶褐色釉がかけられている。耳部に横沈線、その上方に波状沈線を巡らせている。

石 鍋 (16) 16は、石鍋口辺部の小片。口径21.6cm、内湾する口辺部の厚さは1.2cm。外面に細かなノミ痕が残る。煤は付着していない。また再加工もされていない。

瓦 類 (17) 17は、厚さ1.1cm、表が繩目叩き、裏面に布目痕が見られる。博多遺跡で出土例の多いいわゆる指頭押圧技法による平瓦であろう。須恵質の堅い焼成で、両面とも灰色を呈する。この瓦と対になるのは、菊花葉文の瓦当を持つ軒丸瓦が考えられており、箱崎遺跡では、第2次、5次、9次調査などで出土例がある。

土 鍤 (18) 18は、中央が膨らんだ管状の土鍤で、両端が欠けている。長さ3.46cm、中央部は1.70cm×1.13cm、孔径3mmである。土鍤の出土は、今回の調査区では本例1個のみである。

以上の遺物と他遺構との切り合いから12世紀中ごろの時期を推測した。

4. 摶乱層の遺物

箱崎遺跡は、中世のみの遺跡ではない。確かに現地表下1m程が擾乱されているために保存されていることは少ないが、現代に至る各時代の遺構が積み重なっているはずである。試掘調査によって遺構面の確認を行い、調査期間、予算を確保、準備して本調査を開始するが、ほとんどが工事開始日が切迫しており、調査期間の短縮、発掘作業の効率化が絶えず求められる。このため擾乱層を一気にすき取り、地山面での遺構検出からスタートすることになり、ともすると途中の遺構面調査が疎かになりがちである。今回も例外ではなく、地山に達する途中に数枚の遺構面が存在している可能性が予想された。このために重機によるすき取りや土層清掃作業で出土する遺物も注意深く収集し、ここに図示した。これらは中世前半から現代という時代幅があり、かつ遺構から遊離しているが、箱崎遺跡の全容解明、特に近、現代の様子を知る上で資料的価値は高いと考えている。

遺 物

白 磁 (1~4) 1は、口禿の皿。口径11.0cm、器高2.6cm、わずかに青みを帯びた灰色釉を、底部以外にかけている。器面の調整、施釉とともにやや雑な作りである。2は、口辺部を欠いているが、白磁皿V-2類。体部中位で屈曲し外反する口辺部となる。径5.0cmで露胎の底部は、上げ底に削る。



擾乱層の遺物 22

発掘区全景・第16次調査

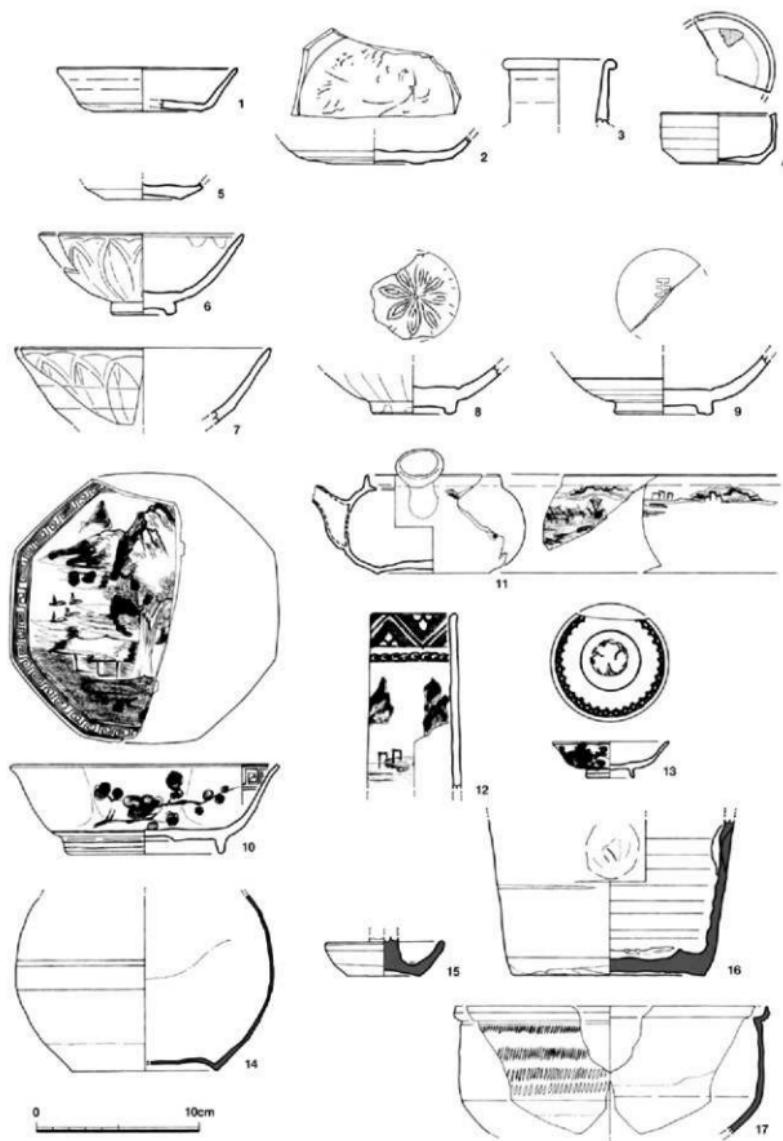


Fig.19 摆乱層出土の遺物実測図 (縮尺1/3)

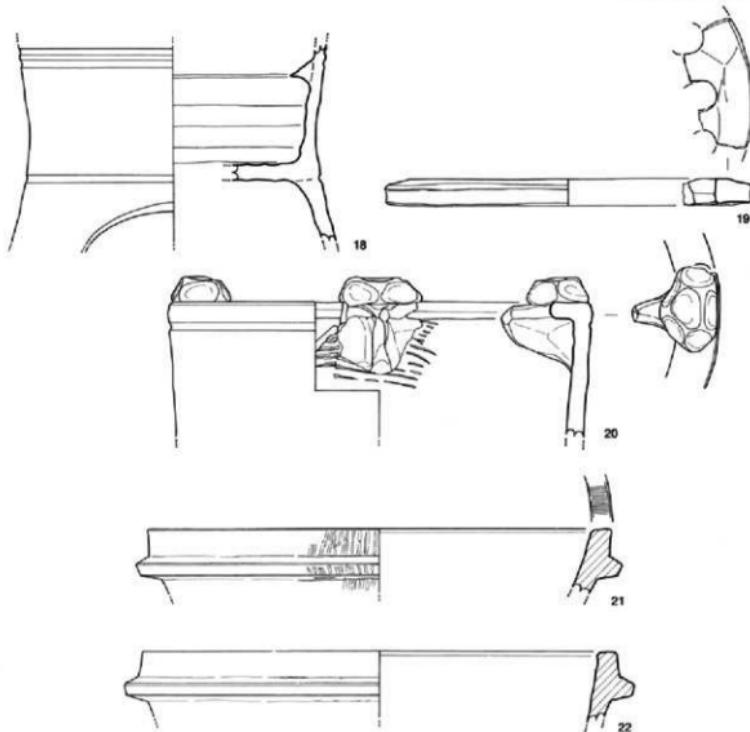


Fig.20 摆乱層出土の遺物実測図（縮尺1/3）

0 10cm

見込み内底に線彫りした草花文がかすかに残っている。灰色の施釉は均一ではなく、垂れた釉端は膨れて小孔が多い。3は、短頸壺か水注の口辺部で、口径7.0cm。口辺端部は外に折り曲げて丸くおさめている。灰白色釉が外面にかかり、内面には小孔が目立つ。4は、合子の身。口径7.0cm、器高3.1cm、灰白色釉は内面にもかかるが、一部露胎。釉端は薄い茶色となっている。

青 磁(5~9) 5は、体部の中位で屈曲する皿、底径4.7cm。見込み内底に草花文や櫛描文はない。釉色は灰色がかった薄いオリーブ色。胎土は濃灰色できめ細かい。6~8は外面に錦運弁文を彫った碗。6は、口径12.5cm、器高4.9cmのやや小振りの碗。高台も径4.0cmと小さい。全体に青灰色釉が厚くかかっているが、錦運弁は、明瞭な輪郭に削り出されている。高台外底の露胎部は、茶褐色。7は、口径15.6cm。灰色がかったオリーブ色釉を厚めに施釉している。運弁文は確かな彫りで、明瞭な筋がつく。8の高台、運弁文ともに削り出しが浅い。見込み内底に線彫りした花文は8弁。釉色は濃いオリーブ色で、高台疊付まで流れている。高台径5.1cm。9は、わずかに黄色を帯びた灰緑色の釉で、高台疊付まで流れている。高台径6.0cm、高台の削り出しが浅い。見込みには文様はないが、内底に「王」字がスタンプされている。



発掘作業員の皆さん

磁器・染付（10～13） 10は8角に型成形した鉢で、口径17.1cm。蛇の目回形の高台径は、9.2cm、器高5.5cm。見込みに山水画を描いているが、その表現は簡略的で稚拙。水面に浮かんでいるのは帆船ではなく水鳥か。口辺部内面は連続雷文、外面は梅枝文。コバルトの発色は良い。11は急須。注口と取っ手を直角に配する。接合部には9個の小孔が開き、偏球形の外面には山水画を染め付ける。その表現は細かく、確かなタッチで遠近感も巧みである。蓋受けの径は、8.2cm。12は瓶の首部で、口辺部には連続三角文、その下方に山水画を描いている。口径が5.2cmと大きいことから、花器などの用途も考えられる。13は口径7.2cm、高台径3.0cm、器高2.2cmの小皿。見込み内底の紋様は、簡略化した松竹梅。外面の草花文は牡丹か。コバルトは黒く濃い発色である。

陶 器（14～17） 14の壺は、1.8mm前後の薄手の作りで、底径9.0cm、体部最大径15.7cm。灰色できめ細かい胎土の上に、灰白色の釉をかけている。内面と底部近くから露胎。体部中位に褐色釉で細線3条を巡らせている。15は、灯明皿で底径4.3cm。濃灰緑色の釉は底部以外に厚めにかかる。露胎の底部は赤茶色。16は、底径11.8cm、竹節のような器形から竹徳利と呼ばれている瓶の下半部。外面はなめらかな調整だが、内面と底部はロクロ痕が目立つ。体部外面には押さえで窪ませている。17は、口径19.4cmの鉢。口辺部の形状から蓋があったのである。体部外面には、大正末頃考案されたという飛びカンナ文が4段巡っている。胎土は灰茶色、内面上半部は露胎。釉色は褐色で、外面には薄く施釉しているが、内面下半部はたっぷりとかかっている。

七 輪（18～20） 18は、七輪の体部中央破片、上部の直径18.9cm。内面にハマを受ける断面三角形の凸帯が貼り付けられているが、天地逆か。19は七輪のハマ、直径22.6cm、厚さ1.6cm。周縁に沿って直径1.9cm前後の小孔が並んでいる。胎土には砂粒、雲母を含むが、焼成、調整ともきわめて良い。20は七輪の上半部で直径26.0cm。口辺部の上と内面に錫受けの突起を貼り付けている。1/8の破片のためにその数は不明。貼り付け部には、粗い条痕を付け、接合を強めている。

石 鍋（21、22） 2点とも滑石製の石鍋で、口辺部下に鋸を削り出している。21は、口径28.5cm、内面はなめらかだが、外面は細かなノミの加工痕が明瞭に残る。また煤のためか鋸より上部も黒色となっている。22の口径はやや大きく、29.2cmを測る。煤の付着はなく、また加工痕も不鮮明。

4. 小 結

第5次調査の成果、特に掘立柱建物跡をさらに検出し、町家の並びや通りの方向復元を期待した。しかし安全対策を最優先したこともあって発掘面積が21m²に狭まり、新しい知見を得たわけではない。しかし箱崎遺跡通常の遺構、遺物であることは、逆に門前町としての形成が広範囲で、かつ同じような生活スタイルであったことを裏付けることにもなる。

もちろん発掘区の広さに比例して調査成果が上がるものではない。逆に小面積だからこそ問題意識を高め、いろんな可能性を求めて取り組むべきである。

今回、井戸の掘り込み面を土層で観察、確認出来たことは、今後の遺構面把握や検出方法に参考になると思われる。箱崎遺跡の28次に及ぶ調査例では、地表下が搅乱していることもあって、複数の遺構面を検出し、調査する機会に恵まれなかったが、基盤となる明黄褐色砂層で検出した遺構の多くは、当然ながら上層からの掘り込みを示していた。町前の復元や敷地、家屋内の様子を知るには、その生活面での把握が必要であり、箱崎遺跡の歴史的変遷をたどるにも層位的発掘は不可欠である。試掘調査時における観察力、予算、期間などの条件整備、そして発掘技術の向上など埋蔵文化財行政に携わる私たちの急務である。

箱崎 11

箱崎遺跡第16次調査報告
福岡市埋蔵文化財調査報告書 第703集
平成14年（2002）3月29日

発行 福岡市教育委員会
福岡市中央区天神1-8-1 TEL.092-711-4667
印刷 ダイヤモンド印刷株式会社
福岡市東区松田3-9-32 TEL.092-621-8711

